歴史地理学 162 18～32 1993. 1

イタリアにおける南北

——国際比較の視座の提起——

竹内啓一

Ⅰ. 国内の地域的二元性
Ⅱ. 南部問題における地理的条件
Ⅲ. 「南部問題」の展開
(1) 「問題」の発生
(2) 南部主義の展開と「良き統治」の神話
(3) 新南部主義の実践
Ⅳ. 地域問題の国際比較のために

Ⅰ. 国内の地域的二元性

本稿はもともと「東北日本と西南日本」と題する大会シンポジウムにおいて国際比較の視点からイタリアにおける南北ダイコタミー(dichotomy, 二元性)についてなした報告をもとにしている。したがって，イタリアの南部問題そのものをひとつの論文の中で概観しようなどと考えるものではもちろんないし，イタリアの南部問題のさまざまな側面について，すでに他の場所で論じたこと[1]の繰り返しは，論旨の展開のために必要な最低限にとどめることにしたい。また，イタリア南部問題の最近数年間における新しい動向についていくつかの検討すべき問題があることはたしかであるが，国際比較の視点を提供するという，当初のシンポジウム報告の趣旨から，イタリア南部が提起している新しい問題の全般的な分析も本稿の課題ではない。歴史地理学における国際比較の可能性を模索するという視点から，イタリアの南部問題を再検討するのがここにおける課題である。

国内に地域的二元性の問題をかかえている国は多い。国内諸地域が社会的，経済的に多様で，住民が程度の差こそあれ，国家に対する帰属意識(identity)とともに地域に対する帰属意識をも持ち，同時に国民経済内部での地域間分業体制が成立し発展しているのは，いかなる国についても妥当する。しかし，そのような地域的多様性にもかかわらず，あるいは多様性のなかに一貫したダイコタミーが認められるとすれば，それには歴史的起源がなければならない。地域的ダイコタミーの歴史的起源に関しては，形式論理的には近代国家成立以前からあった二元性と，近代国家成立後形成された二元性とを区別することができる。さらに形式的にはその起源は近代国家成立前からあったとしても，地域的ダイコタミーが国民国家の政治的，社会的あるいは経済的問題として顕在化または顕著になったのは近代国家成立後である場合と，近代国家成立以前から国家的課題になっていた場合とを区別することができる。

これはしかしながら非常に形式的な議論であって，現実の事例を分析していこうとすれば，いくつかの問題にぶつからざるをえない。まず第1に，近代国家とはなにか，近代国家の成立とはどの時点を指さすのかということが問題になるであろう。政治革命だけに注目すれば，フランス革命のように明確な時点を示すことができようが，その場合でも，フランスというネイションの形成は王朝国家の胎内でなされたし，フランス革命が資本主義的国民経済成立の画期になったわけではない。他方，イギリスに例をとれば，近代国家を成立せしめた画期的な政治革命があったわけではない。列強の植民地支配を経験したいわゆる第三世界の諸国の場合にも，政治的独立をもって近代国家の成立と一般的に

いうことはできず，国民経済の基礎の形成はそれ以前になされていた場合が多い。

日本とイタリアの場合には，政治革命としての明治維新及びイタリア王国の成立（1861年）をもって，多くの虚構を抱えつつも国民国家（nation-state）が成立したと考えられ，それをもって近代国家の成立とみなすとがきる。しかしその場合に，まず念頭におかなければならないのは，幕藩体制のもとでの政治的統一と，国民経済の基礎を提供することになる経済的同質性または地域間の経済的連関が明治維新前にすでに存在した日本と，サルデーニャ王国による軍事行動によって政治的統一が達成される1860年までの千数百年の間，古代ローマ帝国以降，一度も現在のイタリアの全領域が，ひとつの政治的，経済的な単位をなしたことがなかったイタリアとでは事情が非常に違うということである。

周知のように日本では，古代から「東国」という言葉が，畿内から見て東の地方，あるいは箱根・足柄・碓氷以東の国内地域を意味してたえず用いられていたが，イタリアで北部あるいは中北部に対して南部の異質性が問題になるのは，イタリア統一（リソルジメント）が現実的課題になる1830年代になってからのことである[2)]。したがって，さきの形式的分類にそくしていえば，日本における東西（あるいは東北日本と西南日本）は近代国家成立前からあったダイコタミーであり，イタリアの南北は近代国家成立後顕在化したダイコタミーであるということになる。

ダイコタミーにかぎらず地域問題において常に検討されなければならないのは「社会的なもの」と「空間的なもの」との関係である。多くの場合，社会的矛盾が空間的あるいは領域的な形態をとって現象したものが地域問題なのであるが，その際にも，なぜそれが空間的あるいは領域的なものとしてあらわれるのかという考察がなされなければならない。たとえば地域間の経済格差がもっぱら経済部門間の生産性格差に由来する場合にも，その恵まれない地域が生産性の低い経済部門に特化しているのは，自然，交通などの立地的条件だけによっているのか，それとも経済的に恵まれた地域と恵まれない地域との間に，政治的な優劣関係，換言すれば支配・被支配の権力関係があるが故に，ある地域が生産性の低い経済部門に特化することを強制されているのかということが「歴史的に」検討されなければならないのである。

このこととの関連では，経済的地域間格差と政治的差別化とは，ひとつの国の内部で，空間的に必ずしも一致するわけではないことを指摘したうえで，地域的ダイコトミーの場合は，いくつかの（たとえば経済的なものと政治的なもの）ダイコトミーが空間的に重複することが多いという事実に注目しなければならない。その際，地域的ダイコタミーの問題を地域問題一般に解消させないためには，その国の地域問題がなぜ二地域の問題あるいは二つの地域問題に収斂するのかということが明らかにされる必要があろう。

さらに立地的条件という場合にも，自然的条件と地理的位置（交通条件，他地域あるいは国外地域との関係）に関する条件とが「歴史的に」検討されなければならないであろう。ここで「歴史的に」検討ということを再度強調するのは，地域問題や地域的ダイコタミーが存在するということは，その起源があるということだけではなく，それを存続させてきた，すなわちそれを拡大または縮小再生産してきたメカニズムがあることを意味しているという認識にもとづいている。このメカニズムという場合には，政治的，経済的なものだけでなく，偏見や差別，すなわち政治的，経済的メカニズムの前提になる住民の価値観も考慮の対象にされなければならない。この価値観は具体的には，地域住民の，自分の地域に対する優越意識あるいは劣等感としてあらわれるから，地域的アイデンティティと裏腹の関係にある。

地域問題や地域的ダイコタミーを拡大または縮小再生産しながら存続させるメカニズムとの関連で注目しなければならないのは，地域問題

や地域的ダイコタミーが，その国にとって，どの程度まで社会的，政治的問題になっているかということである。たとえば，いかに大きな経済的格差が統計的には確認できても，それだけでは操作概念上の格差あるいは潜在的な地域問題にすぎず，顕在化するためには，それが「問題」にならなければならない。

「問題」になるということは，「問題」を提起する「主体」，「問題」を提起する広義の社会運動が存在することを意味する。「問題」を提起する「主体」は，必ずしも恵まれない，あるいは虐待されている地域ではない。その国の体制（政治的，経済的ヘゲモニーをにぎっている社会集団）あるいは恵まれた地域にとって，国民的統合を維持・強化する必要（治安の維持や内乱の回避という配慮）から，あるいは国民経済の運用における効率（国内市場の拡大，資源の効果的な利用など）という観点から地域問題が提起されることすらあるのである。いずれにせよ，そのような問題の提起や社会運動に対する政策的対応が，地域問題や地域的ダイコタミーの縮小を結果することがあるであろうし，そのような政策的対応にもかかわらず，あるいは政策的対応のゆえに地域問題や地域的ダイコタミーが拡大再生産されることもあるのであるから，どのようにして「問題」になってきたかということが重要である。

以上は，国内の地域的二元性に関する問題の所在の一般的提示である。以下，イタリアの南部問題に関して，社会的なものと空間的なものとの関係を歴史的にたどり，次に南部問題がどのように提起されてきたかということを政策的対応との関係で分析し，イタリアの事例を通じて，東北日本と西南日本という地域的ダイコタミーを国際的比較の観点から考察するための視座を提供するよう試みたい。

II．南部問題における地理的条件

南部の後進性を，基本的にはその劣悪な自然条件や，「野蛮な」アフリカに近く近代ヨーロッパの核心部から離れているという地理的位置から説明する議論は，1860年代にイタリア統一がなされた直後から多かったし，同時に，そのような議論を「宿命論」「ペシミズム」「地理的決定論」として全面的に否定して，地理的条件の役割をことさらに無視する議論も多くあった。歴史地理学にとって重要なことは，当然のことながら，歴史的コンテキストのなかで，地理的条件の意味を社会の論理によってあきらかにすることである。

南部問題はすぐれてイタリア近現代史の問題であるから，古代ローマの時代には，半島南部やシチリアが穀倉地帯であったなどという議論は，さしあたって必要ない。しかし，近代についてみると，北イタリアにおいては，牧草栽培をふくむ複雑な輪作体系（ただし大部分が夏作物である）を取り入れて休閑地をなくし，さらに酪農と結びついた集約的農業を展開するというかたちで北西ヨーロッパ流の農業革命[3]を導入することができたし，ポー河流域の灌漑または冠水農業地帯においては，かのアーサー・ヤングを驚倒せしめたような高い農業生産力水準を実現したのであった[4]。

これに対して，南部においては，その夏の乾燥のために1年生の夏作物の栽培は，灌漑農業によらなければ不可能であったし，非灌漑耕地においては，2年に一度冬コムギを栽培する古代ローマ以来変わらない農法を生産力水準においてこえるものとしては，オリーブ，果樹などの樹木栽培があるだけであった。換言すれば，南部においては，近代の集約的農業は，北西ヨーロッパ流の農業革命とはまったく異なる灌漑農業か樹木栽培というかたちでのみ実現の可能性があったわけであるが，これらの農業はそれぞれ，灌漑施設の建設あるいは傾斜地におけるテラス（階段状樹園）の造営という，小農的技術革新にはなじまない莫大な先行投資を必要とするし，さらに灌漑農業，樹木栽培の生産物は，一般的に自給的農業から程遠い商品生産的な性格が強いから，広範な販売市場が出現する以前には，このような集約的農業は成立しがたい。事実，このようにして，イタリア南部のみでな

く，スペインのアンダルシア，ギリシャの内陸部など，地中海地域の広範な領域が，近代において農業的後進地域になったのである。

経済的後進性と政治的，社会的諸関係における前近代性との関係は地域ごとに分析されなければならないことで，一般化は困難であるが，北西ヨーロッパ流の農業革命がイタリア南部の風土条件のもとにおいては，そのままでは実現されがたかったことはたしかである。他方では，環境論的説明に対する反論としてしばしば指摘されるように，その起源が封建的土地所有に由来する寄生的大土地所有者層（latifondisti）が，まさにそのことが「寄生」の寄生たる所以なのではあるが，農業に由来する剰余を農業生産力の発展のために投下することなく，集約的農業の発展を阻害してきたことも事実である。

ある地域における農業の高い生産性が，そこにおける近代工業の成立と発展をもたらすというためには，さまざまな留保条件をつける必要がある。すでにガーシェンクロンが議論したように，工業化の前提条件（prereqisites）[7]が農業部門からの剰余に由来しなければならないとすれば，農業における生産関係が問題になるわけで，生産力水準は高くても，そこに広範な小土地所有農民が成立していて，高い消費水準を維持していれば，産業資本に転化するような剰余の蓄積はなされえない[5]。他方，国民経済の内部では，資本と技術は，財貨に比して移動にともなう距離の摩擦が小さいから，かなり自由に移動する。したがって，農業部門に由来する剰余の蓄積（たとえば地主資本）が産業資本に転化するのは，同一地域内においてであるとはかぎらないし，農業部門からの剰余の収奪が顕著な地域は，多数住民の所得水準が低く，市場として狭隘であるために，新しい工業の成立，発達にとって不利な条件をそなえているともいえる。

国家の財政機構を通じて，地租などのかたちで農業部門から取り立てられた富が，直接に工業化に，すなわち官営工場の建設なり工業化のためのインフラストラクチャー造成に向けられる場合には，農業と工業との立地条件が異なること（農業にとって恵まれた地域が，工業にとって恵まれた条件をそなえているとはかぎらない），国家の立地政策の形成過程において働く地域的バイアス（特定地域の利益が中央の意志決定過程において強く反映されるような権力機構）などのために，地域間の所得移転をともなうのが普通である。同時に，資本投下と技術移転にとって空間的距離の摩擦または抵抗が小さいといっても，それがまったくないわけではない。それが国外にある場合をふくめて，繁栄した先進工業地域や金融中心に接近していることが，工業化にとって有利な条件をかたちづくる側面のあることを無視することはできない。そして，ある地域において工業が発展することが，市場，技術，熟練労働力の地域内存在と深い関係をもつために，工業化の格差に由来する地域格差は，ミュルダールのいう累積的因果関係（cumulative-causation）[6]によって拡大しつつ存続することが多い。

このようにして，ある地域が工業化において先行した理由，その工業化の基礎の形成に農業がどのような役割を果たしたかということを空間関係に焦点をあてて考察するのに際しては，一般理論などというものはなく，個別具体的な事例を分析しなければならない。1860年代の統一のときまで，政治的，経済的にまったく異なる領域をなしていたイタリアの北部諸地域と南部において，工業化の基礎（base industriale）がどのようにして形成されたかという問題については，1950年代から1960年代にかけて，ガーシェンクロンやエックハウスなどのアメリカの研究者をもまじえて，イタリア近現代経済史研究者の間ではげしい論争がなされた[7]。ここはその論争をあとづける場ではないが，地域的ダイコタミー形成において空間的なものと社会的なものとがどのように絡み合っていたかという観点から要約すると，以下のようになる。

1）統一前において，工業人口の就業人口に対する比重は北部の方が高かったが，南部すなわち両シチリア王国においても，官営工場をは

じめとする工業が存在した。ナポリ地域のインフラストラクチャーの整備などは，北部の繊維産業を主体とする工業地帯のそれに比して遜色のないものであった。しかし，北部のサルデーニャ王国が自由貿易政策をとり，そのもとで民間の資本形成による工業化の萌芽が存在したのに対して，南部の近代工業の芽はブルボン王家の上からの近代化政策のもと，官営工場（軍工廠など特殊な需要にこたえるもの）や手厚い保護関税のもとに存在していたものであった。統一後，サルデーニャ王国の自由貿易政策が全イタリア王国に適用されることにより，南部の工業化の芽は完全につぶされてしまった。イタリアにおける工業の北部偏在の歴史的起源は，何よりも，両シチリア王国とサルデーニャ王国における近代工業の萌芽形態のこのような質的相違と，イタリア統一が北部による南部の軍事的征服というかたちでなしとげられたことによっている。

2） 南部の寄生的大土地所有者は，農業部門に由来する収入の大部分を奢侈的消費か流通部門に注ぎこんでも，統一前にそれを産業資本に転化させることはなかった。ナポリ王国における貨幣の流通量は，イタリアにあった他の政治的単位に比して大きかったが，民間の金融資本が産業資本の形成に貢献することはなかった。

3） 統一後，国家の財政機構を通じて富が南部から北部にどれだけ流れたかということについては，議論が分かれている。たしかなのは，サルデーニャ王国が莫大な負債をかかえていたのに対して両シチリア王国にはそれがなかったこと，統一直後の土地に対する課税が，土地生産力の低い南部土地所有者にとって過重なものであったことの２点である。

4） 統一後の北部における工業化に農業部門に由来する剰余がどれだけ貢献したか，民間部門における資本形成についてみると，それは主として北部の農業に由来するものであったのか，それとも南部の地主資本の転化によるものであったのかという点でも意見が分かれている。中央の政治的意志決定機構のなかでは，統一後20年間に南部出身者の比重が急増したが，彼らが北部への工業の偏在に反対したり，南部への産業誘致に努めるということはなかった。

5） 工業原料の存在，原料の国外からの輸入のための交通位置という点では，水力電気エネルギーが登場するまでは，南北における条件の優劣はなかった。水力発電という点では，アルプスの氷河谷をもつ北部が圧倒的に恵まれており，またイタリア経済が工業化にともなう「離陸」あるいは工業生産の big spurt を経験したのは，長距離送電技術をともなう水力発電が実用化した，前世紀末葉から今世紀初頭にかけてのことであった。

6） 地理的にも北部は北海を囲む北西ヨーロッパの工業中心に近く，また文化的にも，北部はアルプスの北の北西ヨーロッパとの結びつきが近代においては強かった。このことは，近代工業技術の移転という点で北部に有利に働いた。また1890年代以降，北部工業化にドイツ，フランス，ベルギーの金融資本が重要な役割を果たすが，これらの金融資本にとって，北イタリアは情報も多く安心して投資できるところであったが，南イタリアは遠くて馴染みのない，極端にいえばアフリカとあまり区別できない土地であった。

このような近代イタリアの地域的ダイコタミーの形成と存続に関する問題点が，すぐそのまま日本の地域的ダイコタミーの考察に適用できるものでないことはもちろんであるが，以下の相違点には留意する必要があろう。

1） 日本ではイタリアとちがって経済的統一はあったが，幕藩体制下における藩経済の相対的自立性が，地域の経済的特色をかたちづくるのにどのような役割を果たしたのだろうか。明治以降の国内市場の形成と発展のなかでの地域経済のリストラクチャリングは，どの程度まで地域的ダイコタミー形成と関係していたのであろうか。

2） 土地所有関係あるいは農村社会の基本的性格の地域的ダイコタミーは，イタリアに比較して小さいものであったにしても，「東北日本

と西南日本」のダイコタミーにとって，どのような意味をもったのであろうか。

3) 資源，地理的位置を歴史的パースペクティヴのなかで検討するとき，日本のダイコタミーにとっての意味はどのようなものであったであろうか。

4) 日本の地域的ダイコタミーは，イタリアの南北のように領域的にクリアー・カットなものではない。北イタリアでも北東部のヴェネトは，第二次世界大戦の頃までは経済的には後進地域であったが，文化的，社会的には北イタリアに属していた。これに対して南九州，四国太平洋側は，経済的に後進地帯であったのみでなく，文化的，社会的にどこまで近畿と一体をなしてきたかという問題がある。薩摩，土佐出身の藩閥政治家は，出身地の繁栄をあまり考えなかった点では，南イタリア出身の政治家との共通性をもっていた。

5) 近代国家の首都という点で，東京とローマはその性格が非常にちがっている。ローマは現在にいたるまで，イタリアの経済的，文化的中心になることはなかったし，大幅な州自治を認めている共和体制のもとではもちろんのこと，イタリア王国のもとでも，東京のように政治権力を集中させることはなかった。

Ⅲ.「南部問題」の展開

(1) 「問題」の発生

すでに見たように，南部の後進性は，さまざまな側面において統一前から存在したが，それが「問題」として顕在化したのは，当然のことながら統一後のことであり，注目すべきこととして，ガリバルディ軍による南部征服直後から，「南部問題」(questione meridionale) という言葉こそ用いられなかったが，南部を新しい王国にいわば併合することの困難は，旧サルデーニャ王国の指導者たちによって痛感されていた。ガリバルディ軍自体がすでに農民暴動の鎮圧にあたらなければならなかったし，宰相カヴールにとっての心配は，南部小ブルジョワの支持をえていたガリバルディがローマ進軍に乗り出してナポレオン3世の介入を招くことであったが，結果的には，ピエモンテ軍を南部に送り込んでガリバルディ軍を解散させ，1865年までに，政府は15万の正規軍を南部に送り込んで，匪賊の反乱 (brigantaggio) を鎮圧しなければならなかったのである[8]。

南部のあらゆる階層にとって，イタリア統一は大いなる幻影であった。ブルジョアジーは農村でも都市でも，重い税負担と自由貿易政策のための産業の衰退に苦しんだ。その苦しみは結局，農民大衆に転嫁され，教会財産や公有地の払下げは遅々としてすすまず，わずかの土地をえた農民も，資本不足から高利の負債を余儀なくされ，それを維持できたものは少なかった。

「南部問題」の名のもとに最初に問題を提起したのは，社会全体，とくに多数をしめる貧困者層に新しい国家に対する忠誠心を育てるという歴史的使命感にもえた，歴史的右派の政治家たちであった。彼らはパリコミューンをもって他山の石として，社会問題の解決をもってのみ革命的混乱を防ぐことができると考えていた。1873年，議会で南部問題という言葉が発言されたとき，そのようなものは存在しないという反論もあったが，1875年にはヴィラッリの「南部からの手紙」が一冊にまとめて出版され[9]，イギリスの新聞，雑誌にもイタリア南部の悲惨な状態がいくつか報告された[10]。これらのこともあって，南部問題を政策の課題にするために，まずその実状を調査する必要が痛感されるようになった。

このようにして政治的保守主義と社会的改良主義との結びつきと，南部問題を政策課題としての社会問題の一環としてとらえる点が，南部問題に関する初期の論者（しばしば初期南部主義者と呼ばれる）の特徴で，1875年から私費でシチリアおよび半島部を調査して報告書を出版したフランケッティとソンニーノがその代表である[11]。ヴィラッリの記述が，ヒュマニストとしての熱情にもとづく告発であったのに対して，彼ら二人にとっては，社会問題の原因の科学的分析がまず重要であった。農業の停滞とその原

因をなす大土地所有制，差配（gabellotto）の存在と小土地所有農民の欠如，都市における企業家精神の欠如，行政的腐敗とマーフィアにみられるような司法上の不正義の指摘など，彼らの科学的分析は画期的なものであった。

その透徹した分析と対照的に，彼らの政策提言は，司法と行政を地域支配の影響から国家の手に戻すという，穏健な改良主義であり，同時に権威主義的なものであった。歴史的左派の立場をとる彼らは，凋落しつつあった歴史的右派が内務大臣に特別権限を与えたり，議会内にシチリア調査委員会を設置するなどの強圧的態度をとっていたのに反対して，南部の実態を知るために私的な調査を行なったのであった。彼らは，南部農民の政治的動員などは考えなかったが，それでもソンニーノのような保守主義者が，1880年以前に，農民の抵抗組織を農業所得のより適正な分配を実現する手段であると示唆していたことは注目に値する。

(2) 南部主義の展開と「良き統治」の神話

ソンニーノとフランケッティが創設した週刊誌 *Rassegna Settimanale* は，のちに南部主義者（meridionalisti）と総称されるようになる南部出身の知識人に，南部問題に関する発言の場を提供したという点で重要な役割を果たした。「南部主義」という言葉は，南部の文化的伝統の主張という意味で1870年代から用いられていたが，1880年代になると，北部あるいは中央（ローマ）に対する南部の政治的主張を意味して用いられるようになった。ソンニーノ，フランケッティと同世代で，*Ressegna Settimanale* の当初からの寄稿者でありながら，南部問題に関しては1880年代以降，ソンニーノ，フランケッティとは違う立場をとり，同時に彼らよりも大きな影響力を同時代および後の世代にもった南部主義者は，フォルトウナートであった[13]。

ルカーニャ出身のブロボン家に忠実な家系の出自でありながら，フォルトウナートは熱心なイタリア統一支持者であったし，南部問題に対する彼の功績は，まず第一に，「国民の半分が貧しく未開な状態で繁栄する大国などありえない」という信念のもとに，南部問題を全国民的な課題として提起したことである。第二に，1880年代，90年代の時点で，南北の格差は統一後増大した，すなわち国家の租税政策，貿易政策などを通じて，南部が北部によって収奪されたという明確な認識のうえにたって，イタリアの国家体制のなかにおける南部の復権を主張したことである。1920年代，ファッシスト政権によって沈黙を強いられるまで南部の後進性を糾弾した一連の論者を南部主義者と総称するならば，そこには自由主義的な保守主義から，アナルコサンディカリズムから社会主義にいたるまでの多様な思想的傾向があったが，以上の2点において彼らは立場を共有していたということができよう。南部農業の発展よりもむしろ工業化の展望を強くだしたという点ではフォルトウナートよりもオプティミストであった20歳若いニッティは，財政学者として，統一後の北部による南部の収奪を実証的に示した[13]。

フォルトウナート，ニッティをふくめて，大部分の南部主義者は，1870年代末からイタリアが保護貿易主義にかたむき，1887年の新関税法で，北部の工業製品と，南部の大土地所有農業の主産物であったコムギとが，いわば「だきあわされて」保護の対象になったことに強く反対した。その根拠は，保護関税が統一後自由貿易政策のもとでようやく育ちつつあった南部沿岸部の樹木，野菜栽培などの集約的農業の発展の芽をつんで，大土地所有者の利益に奉仕することになるというもので，反大土地所有制の立場からでたものであった。当時のヨーロッパ諸国が保護主義の方向にむかっていたことを考慮すれば，同じ南部主義者でも，工業の発展には保護関税が必要であることを主張していた共和主義者のコラヤンニ[14]，社会主義者のチコッティ[15]の方が現実主義的であった。

フォルトウナートが期待したのは上からの改革で，南部の農民大衆の政治的動員ということは念頭になかったし，その期待のために，彼は

地方分権にはむしろ反対であった。これはニッティについてもいえることである。この点で，南部主義者のなかでも立場を異にしたのが，ひとつはさまざまなかたちで社会主義思想の影響をうけた論者たちであり，もうひとつは，社会主義の影響が南部の農民大衆をとらえるのを何よりもおそれたカトリックの立場，具体的には1919年のイタリア人民党（第二次世界大戦後キリスト教民主党になる）の創設にいたるシチリアの神父ストゥルツオの運動[16]であった。このように相対立する思想的基盤，政治的展望のうえにたちながら，二つの立場の実践的提言は驚くほど共通していた。それは当然のことでもあったわけで，彼らにはフォルトゥナートにあったような中央政府の「良き統治」に対する幻想はすでになかったから，南部の農民大衆を政治的に動員しようとしたのであり，そのためには，南部の農民大衆の貧困の解消のための改革をまず掲げなければならなかったからである。そのために，まず大土地所有制の廃絶，そして南部のことは南部に決定させよという観点からの，何らかのかたちの地方分権を共通して主張したのであった[17]。

その他，比例代表制の導入など，サルヴェミーニ[18]をはじめとする社会主義の影響のもとにあった論者とストゥルツオとの間には共通の政策目標があった[19]し，この一致は，第二次世界大戦後のイタリアにおける南部政策の展開を分析する際には重要なことである。しかし，サルヴェミーニ，デ・ヴィティ・デ・マルコ，ドルソなどの南部主義者にとっては，改革は労働者・農民階層の解放，すなわち階級闘争における勝利のためのものであったのに対して，ストゥルツオにとっては，改革は階級間の衝突を回避するためのものであったという根本的相違点があったことを見逃してはならない。

工業化イタリアにおいて，北部産業ブルジョアジーと南部の寄生的大土地所有者層という二つの指導階層の利益の一致があるという指摘は，すでにフォルトゥナートなどの自由主義的南部主義者の議論のなかにあったことである。さらに，リソルジメントを通じてイタリア王国の権力構造がどのようにして形成されたかというサルヴェミーニの分析と，南部社会において知識人の果たす役割についてのドルソの考察に学びながら，イタリア共産党の創設者グラムシは，北部労働者階級と南部農民階層の同盟，この同盟の形成において新しい南部知識人の果たすべき役割について，1926年逮捕されるまで考察を続けた[20]。1920年代になってグラムシは，南部問題に断片的な言及をするようになっていたが，南部における革命，知識人層の役割に関するまとまった考察は，1930年の非合法出版物および「獄中ノート」においてはじめてなされたから，南部問題に関するグラムシの考えが，イタリアにおいて大きな影響力をもつようになるのは第二次世界大戦後のことである。また，その考察が実践活動から切り離されたところでなされたために，当然のことながら，南部農民大衆をいかにして政治的に動員していくかという具体的戦術は，グラムシの考察の外にあった。

(3) 新南部主義の実践

南部問題が，人民党，社会党，共産党の綱領のなかにおいて全国民的な課題として提起されはじめたとき，第一次世界大戦後の社会不安，中産階層の経済的不満に乗じて，ファッシスト政権が成立し，ニッティ，サルヴェミーニ，ストゥルツオは亡命し，グラムシ，ドルソは逮捕されて沈黙を余儀なくされた。

土地改良，簡易水道の建設など，ファッシスト政権が，限られた地帯においてではあるが，南部住民の福利のためにいくつかの事業を行なったことは事実である。また，世界恐慌後の信用危機に対処するためのものであったが，産業復興公団（ＩＲＩ）を設立し，市場への公権力介入のためのひとつの道をひらいたのも事実である。しかし注意しなければならないのは，南部の経済は，全体として，アウタルキー政策のもと，土壌侵食の激化，老朽工場施設の酷使などのため疲弊し，さらにイタリア南部は1943年から44年まで直接の戦場になって大きな破壊をこ

うむったということである。ＩＲＩが南部開発で役割を果たすようになるのも，反独占の意味をもって再編成された戦後のことである。

しかし最も由々しかったことは，ファッシスト政権は，南部問題はもう存在しないと言明することにより，全国民的課題になりつつあった南部問題を，ポンティーノ干拓問題，シラ山地土壌問題などの個別問題に解体し，プロレタリア国家の膨張主義は善であるというスローガンにすりかえようとしたことであろう。ただイタリアにおいては，反ファッシズムの地下運動が常に存在したし，南部問題は消滅したというデマゴギーが全イタリア社会によって受け入れられたわけではなく，最終的には，イタリアは，反ファッシズム勢力が自らをファッシズム，ナチズムの支配から解放したのであった。

戦後（厳密にはイタリアの連合軍への降伏後），権力の座についた反ファッシズム統一勢力の中心は，ストウルツオが創設した人民党の後身であるキリスト教民主党と，グラムシによって創設された共産党であったが，それだからといって，南部問題に関するストウルツオやグラムシの理念が戦後すぐにそのまま政策として実現されたわけではない。資本主義世界はすでに1930年代のアメリカのニュー・ディール政策およびイギリス不況地域対策を経験し，経済学の理論もまた，公権力の市場への介入によって完全雇用や国民経済の効率的な成長が実現されることを説明するようになっていたのであるが，イタリア共和国の制憲議会では，経済計画の是非の議論からはじめなければならなかった。

しかし他方では，南部にファッシスト政権前の政治体制を再興することが不可能なことは，誰の目にも明らかであった。南部主義左派が強く主張していた南部農村大衆の政治的動員が現実のものとなっていて，日雇い農業労働者と小作人が組織化され，彼らによる土地占拠（逆ストライキの名のもと，地主の耕地を契約なしに耕作すること）が共産党の指導のもとに頻発したし，キリスト教民主党も中小自作農を組織して，大土地所有制の解体を要求した。国際関係における冷戦の勃発の結果，1947年，社会党，共産党が連立内閣から追い出されて野党にまわったときから，南部における社会的，政治的緊張が高まり内乱直前の状態になったが，1950年，キリスト教民主党はこのような社会的，政治的緊張をやわらげることをも視野にいれて，農業改革の実施と，南部における産業基盤整備のための政府出資による南部公庫（Cassa per il Mezzogiorno）の創設を決定したのであった。

第二次世界大戦後の南部開発政策の思想的基礎を提供し，また開発政策にあたったテクノクラト集団の指導者でもあった代表的人物はロッシ・ドーリア[21]とサラチェーノ[22]であった。彼らは自らの立場を「新南部主義」と呼んでいるように，公権力の介入による南部の復権，具体的には南部農民を貧困な状態におくとともに農業生産力発展の障害をもなしてきた大土地所有制の廃絶，南部の工業化による南北格差の是正をめざしたという点で，彼らの理念は南部主義を継承するものであった。しかし実際にどのような立法措置がとられ，それらの法，制度がどのように運用されてきたかということを分析すると，さまざまな利益集団，キリスト教民主党右派から共産党にいたるまでの多様な政治集団の主張の妥協の産物が現実の政策とそれらの効果であったことがわかる。

南部主義左派によって主張され，ストウルツオも主張した地方分権は，共和国憲法に，州（regione）の大幅な自治を規定するというかたちで実現したが，実際に20の州すべてで州議会選挙が憲法の規定どおり実施されたのは，憲法実施後20年以上たった1970年のことであった。なぜ州自治の実施がこれだけひきのばされたかといえば，社会党，共産党が野党としてキリスト教民主党と鋭く対立していた段階では，首都のあるラツイオ州をふくめて中部イタリア諸州では，共産党と社会党が単独または連立で勝利をおさめることが確実だったので，キリスト教民主党は，社会党が中央政府参加を決めるまで，州自治の実施をいわばさぼっていたのであり，社会党の側でも，中道左派政権に参加する条件

のひとつとして，州自治の完全実施を1963年の時点でキリスト教民主党に要求したのであった。

農業改革，南部開発公庫の設立という一連の重要な南部開発政策の開始も，北部の産業資本にとっても，西ヨーロッパの共同市場化という展望のもとに，南部の所得水準を高めて国内市場を拡大し，イタリア経済の体質を強化することが必要だったからこそ，受け入れられたのであった。したがって農業改革も，立場によって異なった意図をもって受け入れられた。農業労働者，小作農の立場にたっていた共産党と社会党は，少しでも多くの農民に土地を与えることを主張したが，キリスト教民主党およびロッシ・ドリアたちにとっては，農業生産力の上昇が第一の目的であった。

結果として，農業改革は部分的なものであり，地域ごとに立法措置がとられて，限られた地域でのみ農業改革は実施された。また実施地区においても，強制買収の対象になったのは，樹木も植えられず灌漑設備もない粗放な耕地に限られた。それが土地改革ではなく農業改革である所以は，改革公団による土地改良事業をともなうことを原則にするという，改革テクノクラトの意図が強くだされたことによる。しかし土地の配分を受けた農民の経営規模は，左翼勢力の要求にこたえて少しでも多くの農民に土地を分配しようとしたために概して小さく，西ヨーロッパの他の諸国なみの自立安定農業経営を育てるという目的にはほど遠かった。

南部開発公庫は，当初，大部分の支出を農業基盤および生活基盤の整備に向けていたが，1957年からは，工業への融資をふくめて南部の工業化に主力を注ぐようになった。同時に，国家資本による持株会社（ＩＲＩ，ＥＮＩなど）がコントロールする企業が，南部に大量の設備投資を向けるようになった。そして1986年法律64号によって南部公庫が南部開発庁（Agenzia per la Promozionedello Sviluppo del Mezzogiorno）に再編成され，州に大幅に権限を委譲するときまで，時限立法は何回か更新され，莫大な公共資本が南部に注ぎこまれた。

このように機構は変わったが，本質は現在も変わっていない。そして，それだけ多額の公共投資がなされ，製鉄業をはじめいくつかの部門では，全イタリアにしめる南部の比重は飛躍的に増大したが，一人あたり所得，工業従事者の比重などからみた南北の格差は，縮小するどころか，拡大する傾向にある。これは，すでにいくつかの実証的な産業関連分析によって示されているように，南部に投下された公共投資の波及効果の非常に多くの部分が，北部の民間部門によって吸収されてきたということとの関連において理解されなければならない。換言すれば，莫大な公共投資を南部におこなって，その波及効果を北部の民間部門が吸収し，イタリア経済の良好なパーフォーマンスを維持するというメカニズムができあがっている，あるいはイタリア国民経済にビルト・インされているから，莫大な支出をともなう南部開発政策が，40年以上も北部産業資本も支持して続けられてきたのだといえるのではなかろうか。

たしかに，近年北部では，南部開発の負担はもう御免だという主張を掲げる北部リーグ系の政治勢力が力を得てきているが，その支持層は中産階層であって，大産業資本の指導層には，北部リーグ系の政治活動は影響力をもっていない。南部開発投資は，もはや完全に体制化された，いや体制の存続のために必要なものになっているのであり，自分たちの払った税金が南部の怠け者たちのために無駄につかわれているという小市民的感情から南部開発政策に反対する北部リーグ系の政治勢力の伸長は，限界をもっているといえよう。

大土地所有階層が南部知識人階層を介して農民大衆を支配し，北部金融資本の番犬をもつとめるというかたちで成立していたグラムシのいう南部農業ブロックは，第二次世界大戦後の農業改革を契機に消滅した。それにかわって，開発官僚とそれに寄生する都市ブルジョアジーが，北部産業資本の利益に奉仕しているわけである。これが南北格差を拡大再生産する基本的メカニズムであり，この点では，南部の支配ブロック

の寄生的性格，そして，この支配ブロックが経済的利益と支配的イデオロギーを通じて北部の支配ブロックと実質的同盟を結んでいるというグラムシ的構図の本質には変化がないのである。

Ⅳ. 地域問題の国際比較のために

地域的ダイコタミーとしての「東北日本と西南日本」と「イタリアの南北」を歴史地理学の立場から対比すると，ダイコタミーの起源，その存続のメカニズムの解明という点では，すでにみたように，そこに非常に大きな相違はあるが，比較のための視座を設定して検討することが可能である。しかし，地域問題が「問題」となり，その解決をうたった地域政策がうちだされるためには，「問題」を提起する「主体」が存在しなければならず，広義の「運動」が展開されなければならない，そのような「主体」と「運動」とが比較検討の対象になるという観点からすれば，「イタリアの南北」とちがって，「東北日本と西南日本」とは近代日本において「問題」となる機会が非常にすくなかったことがわかる。

人々がもつ文化的アイデンティティという点では，たとえば標準語に対する西南日本系アクセントがはぐくむスペリオリティ・コンプレックスと，東北日本系アクセントによるインフェリオリティ・コンプレックスを指摘できようが，それが由々しい社会問題になったわけではないし，いくつかの方言の復権運動も近年のことにすぎない。まして，東北日本と西南日本との間に，スペインにおけるカスティリアとカルタルーニャとの間にみられるようなエスニックな対立があるわけでもない。

経済的後進性という点では，東北日本の後進性が問題になったのは，おそらく第二次世界大戦の頃まで，とくに水田農業の生産力構造に関してであって，かつそれが社会的問題になったのは，たとえば昭和恐慌期における東北問題（東北日本問題ではない）のように，限られた時期，限られた地域に関してであった。経済的後進性に由来する地域問題は，近代日本では，ダイコタミーのかたちをとるよりは，農村一般の疲弊と更生の問題のように都市・農村問題のかたちをとるか，全国に散在する過疎地域，過密地域あるいは離島の問題というかたちをとり，これらに対しては，それぞれ政策的対応がなされてきた。

ダイコタミーの問題としてではなく，地域問題としてイタリアの南部問題をいくつかの視点から国際比較することによって，南部問題の特色を明らかにすることができるし，また南部問題自体が，地域問題の国際比較のためのいくつかの視座を提供していることがわかる。この地域問題は，歴史をも異にする社会的，経済的にきわめて異質な地域が，国民国家として政治的に単一の領域に統合されたことに起源している。そして問題は，統一国家の諸制度，機構によってむしろ深刻化したが，虐待されている地域の復権を求める運動が，限られたエピソード的なもの[23]をのぞいて，分離・独立主義すなわち国内におけるもうひとつのナショナリズムのかたちをとることが決してなかったという点で，同じ西ヨーロッパにおける地域問題でも，フランスのブルターニュ問題，大英帝国における歴史的アイルランド問題，あるいはスペインにおけるカタルーニャ，バスク問題と非常に異なった特色を，イタリアの南部問題は示している。同時に，1880年代以降，ファッシズム政権期の中断はあったが，この地域問題を全国民的な課題として提起する運動が，南部の側からのみでなく広範に存在したことも，イタリア南部問題の大きな特色である。

そのような全国民的な問題意識があったからこそ，第二次世界大戦後の南部開発政策が展開されたのである。その政策理念はイタリア固有の南部主義の伝統に根ざしたものであったが，その政策的枠組みは，第二次世界大戦後の統合にむかいつつあった西ヨーロッパ，具体的にはＥＣ共通地域政策によって与えられたものであった。先進工業化諸国の地域政策一般についていえることであるが，地域政策は，常に調和するものではないいくつかの原則の折衷として実

現される。これらのしばしば共存しえない諸原理とは，社会的公正（それ自体，絶対的平等をめざすのではなければ，多様な形態をとりうる），国民経済の効率（それにも資源の最適利用，成長の最大化など多くの解釈がありうる），政治的，社会的緊張を回避しての国家統合の維持・強化，さらには国民経済の効率のような経済のフローの側面だけではとらえられない「生活の質」の改善（平均の向上なのか住民ミニマムの改良なのかという問題がある）などである。南部主義の伝統自体が，論者によってニュアンスを異にするこれら諸原理の混合物であったともいえるのだが，その主要な主張は，社会的公正の実現と真の国家的・国民的統合の実現ということであった。

第二次世界大戦後実施にいたった南部政策は，既得権益を多くもつ産業資本家，北部中産階層などのコンセンサスのうえに実現されたのであるから，伝統的南部主義の理念がそこにそのまま生きているわけではない。見かけ上，あるいは名目上，開発投資のかたちで南部への莫大な所得移転がなされても，産業連関効果を分析すれば，その多くの部分が北部経済の成長に寄与しているのも，現在のイタリアの社会関係，権力構造をみれば十分に説明のつくことである。もちろん，このような開発の波及効果というかたちでの南部から北部への価値移転とは逆方向の，地下経済（マーフィア経済）における富の移動もあるのであるが，イタリア南部の事例は，そのような地域間の経済の動態を分析しないかぎり，地域経済構造あるいは開発政策の効果などを云々できないことを教えているのである。

（一橋大学社会学部）

〔注〕

1) 詳しくは以下の拙稿を参照されたい。「イタリアにおける『南北問題』の起源と問題展開」経済地理学年報，7，1961。「南伊社会と南部問題」一橋論叢，58，1967。「ストゥルツォ神父における南部主義」地理，16，1971。「南伊のプロヴィンチャリズモ—メリディオナリズモの位置づけに関する一試論」日伊文化研究，10，1971。「第二次大戦後のイタリア『南部問題』の理解をめぐる論点」一橋論叢，72，1974。「リソルジメントと地域問題」SPAZIO，9，1974。「南イタリアの地域問題」地域開発，178，1979。「南部主義者ジュスティーノ・フォルトゥナートの虚像と実像」一橋論叢，88，1982。「マーフィアと都市」一橋論叢，97，1987。「イタリア『南部問題』と地域政策」（川島哲郎・鴨澤巌編『現代世界の地域政策』所収，大明堂，1988）。

2) ナポリ王国の経済的後進性，とくに農業のそれを北部にあった諸国のものと比較して論じたナポリやパレルモの知識人の例は，A. Genovesi, P. Balsamo のようにすでに18世紀後半から19世紀初頭にかけてあったが，統一イタリアを展望して南部の社会的，経済的後進性（前近代性）が論じられるようになるのは，初期リソルジメントの運動のあとをうけてマッツイーニ主義の運動がおこってくるなかにおいてであった。とくにミラノの共和主義者 C. Cattaneo の書いたものがこの点で注目される。1934年 *Annali Universali di Statistica* に発表された 'Lordure raccolte sulle strade d'Italia dal signor dott. Gutzkow' に「イタリアの南部の貧困」という表現があるし，1858年に *Crepuscolo* に発表された 'La città considerata come principio ideale delle istorie italiane' では都市の役割が北イタリアと南イタリアとでは異なっていたことを論じている。

3) ここでは農業革命ということばを，産業革命（industrial revolution）に先行または随伴する農業における技術革新の意味で用いる。Augé-Laribé, M. (1955): *La révolution agricole*, Paris, および Mingay, G.E. (1977): *The Agricultural Revolution, Changes in Agriculture* 1650—1880, London における用語の定義がこれに該当する。

4) Young, A. (1792): *Travels during the Years* 1787, 1788 *and* 1789. London, 189-257. ヤングの北イタリア農業に関する記述については，拙稿「イタリアにおける地誌のひとつの伝統—カルロ・カッタネオを中心にして—」人文科学研究（一橋大学），9，1967において考察した。

5) Gerschenkron, A. (1962): *Economic Backwardness in Historical Perspective*, Cambridge (Massachusetts). 本書に収録されている論文はいずれも1950年代に書かれたものであるが，本稿との関連で重要なのは，第2章(pp. 31-51) および第5章 (pp. 90-118) である。ガーシェンクロンは，独自の用語を用いており，「生産関係」とか「剰余の蓄積」といった用語は竹内によるものである。

6) Myrdal, K. M. (1957): *Economic Theory and Under-developed Regions*, London.

7) 1960年代の論争は，A.Caracciolo 編の "*La formazione dell' Italia industriale*", Bari, 1963にまとめられているし，論争の全貌は，G. Are, "*Alle origini dell' Italia industriale*", Napoli, 1974 で手際よく総括されている。

8) これについては，古い拙稿「ブリガンタッジオ考—イタリア南部の山賊について—」イタリア学会誌，11，1962で論じたし，新しい日本語の文献としては，藤沢房俊『匪賊の反乱，イタリア統一と南部イタリア』太陽出版，1992がある。

9) Pasquale Villari は，1861年から，最初はナポリから，のちにはフィレンツエから，ヒュマニスティックな使命感から．南部大衆の悲惨な情況を，ミラノの *La Perseveranza* などに寄稿していたが，1875年，フィレンツエの Le Monnier から "*Le lettere meridionali e altri scritti sulla questione sociale in Italia*" として出版された。

10) これはナポリのマッツイーニ主義者 Alberto Mario と結婚したイギリスのジャーナリスト Jessie White の筆になるものであった。

11) Franchetti L. (1875): *Condizioni politiche e amministrative delle province napoletane*, Firenze, Fanchetti, L. (1877): *Condizioni politiche ed amministrative della Sicilia*, Firenze, Sonnino, S. (1877): *La contadini in Sicilia*, Firenze.

1875年にフランケッティは28才，ソンニーノは26才であった。二人とも1880年代には下院議員になり1890年代以降は中央政界で重要な地位をしめた。ソンニーノはいくつかの大臣，首相（2回），第一次世界大戦中の外務大臣をつとめたし，フランケッティは晩年，上院議員に任命された。

12) 南部問題に関する主要な著作は Giustiono Fortunato, *Il Mezzogiorno e lo Stato italiano*, Bari, 1911 にまとめられている。ヴィラッリが個人的にフォルトウナートをフランケッティ，ソンニーノに引き合わせたという事実だけによるのではなく，いかにしてフォルトウナートが1870年代のヴィラッリ，フランケッティ，ソンニーノを継承したかということについては，Salvadori, M. L. (1960): *Il mito del buongoverno. La questione meridionale da Cavour a Gramsci*, Torino, 147-153 で考察されている。

13) Francesco Saverio Nitti の著作活動は，1888年から50年以上にわたるが，第二次世界大戦後の政府の介入政策をつよく主張したいわゆる「新南部主義」の先駆者として高く評価され，*Edizione Nazionale delle Opere di Francesco Saverio Nitti* として，18巻の全集が，1960～70年代にバリの Laterza から出版されている。この問題については，Vol. II *Nord e Sud* (1899-1900), Vol. IV *Inchista sulle condizione dei contadini in Basilicata e in Calabria* (1910, 2分冊) において論じられている。

14) Napoleone Colajanni の1878年から1898年までの著作は，"*Democrazia e Socialismo in Italia*", Milano, 1959 にまとめられている。

15) Ettore Cicotti (1904): *Sulla questione meridionale*, Milano.

16) Luigi Sturzo については，前掲拙稿，1971 および Salvadori, 1963, pp. 367-456 を参照。

17) ストウルツオは，南部における大土地所有者層の衰退，農民層を基盤にした新しい知識人指導者層の台頭を展望した Guido Dorso, "*La rivoluzione meridionale*" の書評 (*Bollettino Bibliografico di Scienze Sociali*, III-1) において，ドルソの南部自治の考え方に共感を示している。

18) 社会党の北部工場労働者偏重，南部農民軽視の路線に反対して社会党を脱党した反ファッシ

ストGaetano Salveminiの1900年以降の著作は，*Scritti sulla questione meridionale*, Torino, 1955, *Movimento socialista e questione meridionale*, Milano, 1968に収録されている。

19) Cafiero, S. (1989) : *Tradizione e attualità del meridionalismo*, SVIMEZ, pp. 37-38.

20) 南部問題に関するグラムシの考察は，未完の論文 Alcuni temi della questione meridionale として，1930年にパリで発行された *Stato Operaio* に掲載された。

21) Pasquale Saraceno の思想がもっとも良くでている著作としては，*Iniziativa privata e azione pubblica nei piani di sviluppo economico*, Roma, 1959, *Il nuovo meridionalismo*, Napoli, 1986 があげられる。

22) Manlio Rossi-Doria の代表的な著作としては，*Riforma agraria e politica meridionalistica*, Bologna, 1948, *Dieci anni di politica agraria del Mezzogiorno*, Bari, 1958, *Scritti sul Mezzogirno*, Torino, 1982 があげられる。

23) 1893年のシチリアのファッシ運動，第二次大戦直後のシチリア，サルデーニャにおいて，少数によるものではあったが，分離主義の主張がみられた。

THE NORTH-SOUTH DICHOTOMY IN ITALY : FOR A DISCUSSION ON AN INTERNATIONAL COMPARISON OF REGIONAL DICHOTOMIES

Keiichi TAKEUCHI

This paper is based on the author's report presented at the symposium on Northeastern Japan and Southwestern Japan, on the occasion of the national convention of the Historical Geography Society of Japan held in Chiba in May, 1992.

To begin with, the author presents a typology of regional dichotomies according to historical origin as follows : 1. The dichotomies which have existed since before the formation of the modern nation-state ; 2. The dichotomies which already existed in the period of kingdoms or feudal states preceding the formation of the nation-states, but which became explicit only after the formation of the nation-states ; 3. The dichotomies formed after the establishment of the nation-state. The author then goes on to emphasize the importance of analysing not only the origins of the primal dichotomies, but also the mechanism responsible for reproducing sometimes to a greater degree at other times, the dichotomies that have occurred up until the present time.

The Japanese dichotomy of northeast and southwest belonge to the first type. Since the Ancient period in Japan, the eastern provinces have always been considered economically and culturally backward, but the demarcation of an exact boundary between northeast and southwest is hardly possible, since the boundary changes shape according to the historical period under consideration. In modern Japan, what used to be called Edo became the capital and is now Tokyo ; and the Tokyo area, which historically once belonged and culturally still belongs to the eastern provinces, is no longer economically backward.

The question of the Mezzogiorno as a regional problem in Italy began to take shape only after the unification of Italy in the 1860s, and in the sense that, prior to

unification, the north, centre and south of Italy had belonged to politically differerent unities. Although the social, administrative and economic situations of the north and the south had always been extremely different, the root of the Mezzoiorno problem was to be found, not in the differences but rather in the process of unification carried out under the political hegemony of the north. Due to the governmental fiscal and tariff policies, the economic disparity between Northern and Southern Italy showed a definite increase in the process of industrialization. Moreover, the social backwardness of the South, evidenced in the existence of parasitic, large land ownership (*latifondo*), the climatic conditions which made the development of modern intensive agriculture difficult, and the remoteness of Southern Italy from the northwest European financial and industrial core contributed to the formation of economic backwardness.

In comparison with the Italian Mezzogiorno, the problem of northeastern Japan is very different. In this region, in modern Japan, what problems there are have never been clear-cut except in the periodic arguments involving the rural poverty of Tohoku (the northeastern part of Honshu) in the 1930s. There has been no discussion on the exploitation of the northeast in favour of the southwest, as was had in the case of the Mezzogiorno in Italy.

After World War II, the socio-economic development of the Mezzogiorno having become the national task of Italy, over the past forty or more years, a huge public investment has been made towards this end. There is no doubt that from the social and cultural point of view the regional dichotomy in Italy has lessened; nonetheless, the economic disparity between north and south very clarly still exists, while within the South itself, a sharp contrast between the prosperousand the declined areas also exists. The persistence of the economic regional dichotomy is mainly due to a built-in mechanism in the Italian national economy, which shifts the larger part of the benefits, or the so-called spread effects, of public investment in the South to the North, in favour of the private industries of Northern Italy. In Japan, the backwardness of the east or the northeast regions disappeared after World War II, even in the agricultural sectors. If anything resembling a regional dichotomy of some kind were still to be found, it would be in the cultural sphere; but even in this particular area, there is far less discrimination on the part of the southeastern people towards the northeastern people; in former times, for example, it was enough for a person to speak with a northeastern dialect to invite the contempt of the people of the southwest. But this situation has seen a rapid mitigation over the past years.